

§8. 多項式の剰余とユークリッドの互除法

一般に、多項式を多項式で割り切ることはいできないが、整数の場合と同様に、商と余りを考えることができる。また、2 個 (以上の) 多項式に対して最大公約数 (= 整数の場合と同じ役割を果たす多項式) を考えることができ、それをユークリッドの互除法の多項式版を用いて求めることができる。ここでは、これらの理論を学ぶ。

● 8-1 : 除法の定理

除法の原理の多項式版を述べよう。

定理 8-1-1 (除法の定理)

任意の多項式 $f, g \in \mathbb{K}[X]$, $g \neq 0$ に対して、次の条件 (i)(ii) を満たす多項式 $q, r \in \mathbb{K}[X]$ が一意に存在する。

$$(i) f = gq + r.$$

$$(ii) 0 \leq \deg r < \deg g \text{ または } r = 0.$$

q を、 f を g で割ったときの商 (quotient) といい、 r を、 f を g で割ったときの剰余 (remainder) または余りという。

(証明)

証明の便宜上、 $\deg 0 := -1$ と定める (この証明の中だけで通用する定義)。

I. q, r の存在の証明 :

$\deg f$ に関する数学的帰納法で証明する。

① $\deg f = -1$ の場合 :

$f = 0$ であるから、 $q := 0, r = 0$ とおけばよい。

② n を 0 以上の整数とし、 $\deg f < n$ を満たすすべての多項式 $f \in \mathbb{K}[X]$ について、定理は成り立つと仮定する。

$\deg f = n$ を満たす任意の多項式 $f \in \mathbb{K}[X]$ を考える。

• $\deg g > n$ のときには、 $q = 0, r = f$ とおけばよい。

• $\deg g \leq n$ のときには、

$$f = a_0 + a_1X + \cdots + a_nX^n \quad (a_n \neq 0, a_0, a_1, \dots, a_n \in \mathbb{K})$$

と書き、 $m = \deg g$ とおいて、

$$g = b_0 + b_1X + \cdots + b_mX^m \quad (b_m \neq 0, b_0, b_1, \dots, b_m \in \mathbb{K})$$

と書く。このとき、

$$f_1 := f - \frac{a_n}{b_m} X^{n-m} g \in \mathbb{K}[X]$$

とおくと、 $\deg f_1 < n$ となる。帰納法の仮定から、 $f_1 = q_1g + r_1$ かつ $\deg r_1 < \deg g$ を満たす多項式 $q_1, r_1 \in \mathbb{K}[X]$ が存在する。よって、

$$q := \frac{a_n}{b_m} X^{n-m} + q_1, \quad r := r_1$$

とおけばよい。

II. q, r の一意性の証明 :

f が次のように二通りに表わされたとする。

$$f = gq + r = gq' + r', \quad \deg r, \deg r' < \deg g$$

このとき、 $q = q'$ かつ $r = r'$ となることを証明すればよい。まず、式変形して、

$$(*) \quad g(q - q') = r' - r$$

を得る。ここで、 $q - q' \neq 0$ と仮定すると、 $r' - r = g(q - q') \neq 0$ であり、

$$\max\{\deg r, \deg r'\} \geq \deg(r' - r) = \deg g + \deg(q - q') \geq \deg g$$

を得る。これは、 $\deg r, \deg r' < \deg g$ に矛盾する。よって、 $q = q'$ であり、したがってまた、等式(*)より $r = r'$ である。□

例 8-1-2 有理係数多項式 $f = X^5 - 3X - 2$, $g = X^4 + 2X^3 + 1$ に対して、 f を g で割ったときの商と剰余を求めよ。

解：

$f - qg$ の次数が $\deg g = 4$ より小さくなるような多項式 $q \in \mathbb{K}[X]$ が求まればよい。

まず、 f から X^5 の項を消すために Xg を引く。次に、 $f - Xg = -2X^4 - 4X - 2$ から X^4 を消すために $-2g$ を引く。すると、 $f - Xg + 2g = 4X^3 - 4X$ となる。これより、 $q = X - 2$, $r = 4X^3 - 4X$ とおけば、 $f - qg = r$, $\deg r < \deg g$ となるから、 f を g で割ったときの商と剰余はそれぞれ $q = X - 2$, $r = 4X^3 - 4X$ である。□

● 8-2 : 最大公約数

2つの多項式 $f, g \in \mathbb{K}[X]$ に対して、 $f = gh$ となる $h \in \mathbb{K}[X]$ が存在するとき、 g は f の約数 (divisor) である、あるいは、 f は g で割り切れる (divisible)、あるいは、 f は g の倍数 (multiple) であるといい、記号で $g|f$ と書く。

注意1: f が g で割り切れないことを $g \nmid f$ によって表わす。

注意2: $f \neq 0$ ならば $g \neq 0$ であり、 $\deg g \leq \deg f$ となる。

注意3: 多項式なのに約数、倍数と呼ぶのは少し変な気がするが、このような呼び方 (翻訳) が定着している。英語の “divisor” “multiple” は、それぞれ “割るもの” “何倍かされたもの” という意味であり、“数”に限らず使うことができる。

例 8-2-1 有理数係数多項式 $f = 2X^4 + 2X^3 - X^2 + X - 1$ は、 $\mathbb{Q}[X]$ において、 $f = (2X^2 + 1)(X^2 + X - 1)$ と書けるので、 $2X^2 + 1$ は f の約数である。また、 $f = (X^2 + \frac{1}{2})(2X^2 + 2X - 2)$ とも書けるので、 $X^2 + \frac{1}{2}$ も f の約数である。

上の例からわかるように、一般に、 $g \in \mathbb{K}[X]$ が $f \in \mathbb{K}[X]$ の約数であれば、 g に0でない定数 $a \in \mathbb{K}$ を掛けて得られる多項式 ag もまた f の約数になる。通常、多項式の約数・倍数を考える際には、0でない定数倍の違いは無視する。

定理 8-2-2

n 個の多項式 $f_1, \dots, f_n \in \mathbb{K}[X]$ ($f_1 \neq 0$) に対して、次の条件 (i)(ii) を満たす多項式 $d \in \mathbb{K}[X]$ が定数倍を除いて一意に存在する。

(i) $d|f_i$ ($i = 1, \dots, n$).

(ii) $d'|f_i$ ($i = 1, \dots, n$) を満たす任意の $d' \in \mathbb{K}[X]$ について $\deg d' \leq \deg d$.

また、このような多項式 d は $\mathbb{K}[X]$ の部分集合

$$\{ a_1 f_1 + \cdots + a_n f_n \mid a_1, \dots, a_n \in \mathbb{K}[X] \}$$

の中の 0 でない次数最小の元として特徴づけられる。したがって、この集合は d の倍数の全体に一致する：

$$\{ a_1 f_1 + \cdots + a_n f_n \mid a_1, \dots, a_n \in \mathbb{K}[X] \} = \{ ad \mid a \in \mathbb{K}[X] \}.$$

条件 (i)(ii) を満たす多項式 d の中で最高次の係数が 1 のものを f_1, \dots, f_n の**最大公約数** (the greatest common divisor) といい、 $\gcd(f_1, \dots, f_n)$ または、単に、 (f_1, \dots, f_n) で表わす。

(証明)

ここでは $n = 2$ の場合に証明する (一般の場合も全く同様に証明できる)。

以下、 $f = f_1, g = f_2$ とおく。

I. d の存在の証明：

$$I := \{ af + bg \mid a, b \in \mathbb{K}[X] \}$$

とおく。 $0 \neq f \in I$ であるから、 I は 0 でない元を含む。したがって、 I の中に、0 でない多項式 d_0 であって、次数最小のものが存在する (自然数の整列性)。この d_0 が (i)(ii) を満たすことを示す。

(i) は任意の $h \in I$ に対して $d_0 | h$ となることから従う。詳細は演習問題とする (演習 8-1)。

(ii) $d' \in \mathbb{K}[X]$ が $d' | f$ かつ $d' | g$ を満たしているとする。すると、任意の $a, b \in \mathbb{K}[X]$ に対して、 $d' | (af + bg)$ となる。したがって、任意の $h \in I$ に対して、 $d' | h$ となる。 $d_0 \in I$ だから、 $d' | d_0$ を得る。特に、 $\deg d' \leq \deg d_0$ を得る。

II. d の一意性の証明：

条件 (i)(ii) を満たす $d \in \mathbb{K}[X]$ は、I の証明の中の d_0 と定数倍を除いて一致することを示せばよい。まず、 d が (i) の条件を満たすことと I(ii) の証明より、 $d | d_0$ を得る。よって、

$$(*) \quad d_0 = dq \quad (q \in \mathbb{K}[X])$$

と書くことができる。一方、 d, d_0 は条件 (i)(ii) を満たすから、

$$(**) \quad \deg d = \deg d_0$$

が成り立つ。 $(*)(**)$ により、 $q \in \mathbb{K}$ でなければならない ($d_0 \neq 0$ より $q \neq 0$ に注意)。

III. (i)(ii) を満たす多項式が I の中の 0 でない次数最小の元として特徴づけられること：

I の中の 0 でない次数最小の元が (i)(ii) を満たすことは、I の中で証明されている。逆に、(i)(ii) を満たす多項式 d をとると、II の証明から、 $d_0 = dq$ ($q \in \mathbb{K} - \{0\}$) となる。よって、 $d = q^{-1}d_0 \in I$ であり、 d は I の中の 0 でない次数最小の元 (のうちの 1 つ) である。 \square

注意 1：条件 (i)(ii) を満たす多項式 d のことを f_1, \dots, f_n の最大公約数と呼ぶのが一般的であるが、この授業では一意性を重視して、最高次の係数が 1 のものだけを最大公約数と呼ぶ。

注意 2：定理 (の証明) より、 $d \in \mathbb{K}[X]$ を f_1, \dots, f_n の最大公約数とするとき、 d は $d' | f_i$ ($i = 1, \dots, n$) を満たす任意の $d' \in \mathbb{K}[X]$ によって割り切れることがわかる。

演習 8-1 上の定理の証明中の下線部分を証明せよ。

ヒント： h を d_0 で割った余りが 0 となることを示す。

0 でない多項式 $f_1, \dots, f_n \in \mathbb{K}[X]$ の最大公約数が 1 のとき、 f_1, \dots, f_n は**互いに素** (relatively prime) であるという。[定理 8-2-2] から直ちに次が導かれる。

系 8-2-3

0 でない多項式 $f_1, \dots, f_n \in \mathbb{K}[X]$ に対して

f_1, \dots, f_n が互いに素

$\iff a_1 f_1 + \dots + a_n f_n = 1$ を満たす多項式 $a_1, \dots, a_n \in \mathbb{K}[X]$ が存在する

● 8-3 : ユークリッドの互除法

最大公約数はユークリッドの互除法を用いて求めることができる。

命題 8-3-1

0 でない多項式 $f, g \in \mathbb{K}[X]$ に対して、 $f = gq + r$ ($0 \leq \deg r < \deg g$ または $r = 0$) を満たす $q, r \in \mathbb{K}[X]$ をとる。このとき、次が成り立つ：

$$\gcd(f, g) = \gcd(g, r).$$

(証明)

[定理 8-2-2] により $I = \{ af + bg \mid a, b \in \mathbb{K}[X] \}$, $J = \{ pg + qr \mid p, q \in \mathbb{K}[X] \}$ とおくと、 $I = J$ であることを証明すればよい。

• $I \subset J$ の証明： $f = gq + r$ と表わされるから $f \in J$ であり、 $g = 1 \cdot g + 0 \cdot r$ と表わされるから $f \in J$ である。これより、任意の $a, b \in \mathbb{K}[X]$ に対して $af + bg$ は $pg + qr$ ($p, q \in \mathbb{K}[X]$) の形に表わされるから $af + bg \in J$ である。こうして、 $I \subset J$ が示された。

• $I \supset J$ の証明： $g = 0 \cdot f + 1 \cdot g$ と表わされるから $g \in I$ である。 $r = -f + gq$ と表わされるから $r \in I$ である。先と同じ議論により $J \subset I$ であることがわかる。

以上より、 $I = J$ が証明された。 □

[命題 8-3-1] を $\deg f \geq \deg g$ の場合に適用することにより、 f と g の最大公約数を求める問題が、より次数の小さい多項式 g と r の最大公約数を求める問題に帰着されることがわかる。したがって、[命題 8-3-1] を繰り返し適用していけば、最後には割り切れる状態になり、最大公約数が求まる。このようにして最大公約数を求めるアルゴリズムを**ユークリッドの互除法** (Euclidean algorithm) という。

例 8-3-2 $f = X^5 - 3X - 2$, $g = X^4 + 2X^3 + 1 \in \mathbb{R}[X]$ の最大公約数を求めよ。

解：

$$f = (X - 2)g + 4X^3 - 4X$$

$$g = \left(\frac{1}{4}X + \frac{1}{2}\right)(4X^3 - 4X) + X^2 + 2X + 1$$

$$4X^3 - 4X = (4X - 8)(X^2 + 2X + 1) + 12X - 8$$

$$X^2 + 2X + 1 = \left(\frac{1}{12}X + \frac{2}{9}\right)(12X - 8) + \frac{25}{9}$$

より、 f と g の最大公約数は

$$\gcd(f, g) = \gcd(g, 4X^3 - 4X) = \dots = \gcd(12X - 8, \frac{25}{9}) = 1$$

である。 □

演習 8-2* $f = X^4 - 12X^2 - 13X - 12$, $g = X^3 - 4X^2 - 9X + 36$, $h = X^3 + 2X^2 - 2X + 3 \in \mathbb{Q}[X]$ の最大公約数をユークリッドの互除法により求めよ。

ヒント：0 でない任意の $f, g, h \in \mathbb{K}[X]$ について、 $\gcd(f, g, h) = \gcd(\gcd(f, g), h)$ 。